

2015年7月31日（金）1校目

上演6

北海道 札幌琴似工業高等学校定時制

「北極星の見つけかた」

第39回全国高等学校総合文化祭
第61回全国高等学校演劇大会

講評速報

生徒講評委員会 担当委員

高橋 翔 （島根県立松江南高等学校）

池阪 真緒 （埼玉県立浦和北高等学校）

神宮 寿朗 （瓊浦高等学校・長崎県）

北極星は、進むべき道がわからなくなった時に、再び歩き出すための目印として夜空に輝いている。この物語は、琴似工業高校の生徒たちがそれぞれに苦しい過去や運命を背負いつつも、今の自分に必要な答えを見つけようと努力する作品だった。

緞帳が上がると、定時制電気科の補習で呼び出されたナツキ、ツヨシ、イワモト、ユウキ、リナの5人が作業机を囲み、ロ々に「ばらばらだ」とつぶやいている。単位を取るためにラジオを組み立てようとするが、部品をどうすればいいかわからないうえに、不良のイワモトは手伝おうとせず、うまくいかない。しかも学校の七不思議に盛り上がるしまつだ。そんな中、掃除用具入れに未完成のラジオを持った全日制のヒロが隠れていた。彼の登場で作業は大きく動き始める。

リアルに作られた実習室での演技が、実際の工業高校での作業に見えた。そして作業の工程をダンスで表現しており、観客を楽しませると同時に時間の経過をわかりやすく伝えていた。また、歌詞が入っている曲が流れており、その歌詞は各場面に合った内容のものであった。

行き詰まる彼らに助言を与える用務員の山田は、大いに観客を沸かせていたが、同時に不思議な印象を与えていた。

ヒロは全日制の教室には入れず、長く授業を休んでおり、学校をやめてしまうということがわかる。5人はヒロのためにもラジオを作ろうとする。ナツキは生まれつき右手が麻痺しているが、彼女はヒロからもらったすべりどめを使って、配線をつなげようと努力した。「つながって」と何度も口にしながら作業をする姿からは、自分達とヒロのつながりをつなぎとめたいという必死さが伝わり、人と人とのつながりの大切さについて考えさせられた。そして、今日がヒロの誕生日だと知った6人は携帯のライトでろうそくを表現する。懐中電灯を持って通りかかった山田も加わり、7つのライトを照らしながらハッピーバースデーの曲を歌いヒロに思いを伝えた。ライトの並びはまるで北斗七星のように見え、会場に感動が広がる。

実際にも定時制の生徒は、この物語と同じような偏見を持たれることがあるのかもしれない。しかし大事なのは、中身でどういう人か、しっかりと受け止めることだと改めて考えさせられた。

一つの目標に向かい、バラバラだったものを繋げるために協力する7人を観ていると、人と人との繋がりを感じることができ、「また明日！」と言える仲間がいることのすばらしさに感動を受ける劇であった。

